皮革の社会史　最終回

プロフェッショナリズムへの回帰をめざして

西村　祐子

はじめに

姫路市は古くから革の産地として知られている。姫路の白なめしで有名な高木地区は明治以降の文書にも皮革の産地として登場し、東京の荒川区や台東区とならんで海外の皮革専門家にもよく知られている。英国の皮革専門家に姫路へゆくというと、羨ましいといわれるほどだ。高木で、馬革のなかでもむずかしくて手間がかかるといわれるコードバンを製造している新喜皮革を訪問した。今回はその時のことを中心に近代皮革産業の成り立ちについても書いてみたい。

コードバンを製造しているのは現在の日本では三社だけである。英国でもコードバンをつくっているのは一社のみで、北米と欧州にも数社しかないという。それほど難しい革なのだ。

元来コードバンは馬の尻の部分の名称ではなく、その由来はスペインの都市コルドバからきている。

かつてはそこでなめされた革が第一級品で欧州の上流社会で珍重され、ブランドとして確立し、コードバンと呼ばれた。だが今日コードバンといえば、馬の臀部を使った革ということになっている。光沢があり、曲げてもしわにならずに経年変化を楽しめる超高級革だ。

馬皮は焼印や傷が多く良質な部分が少ない。また牛より生産自体が少なく原皮が高い。食肉用として育てているカナダやポーランド、フランス、イタリアなどから原皮調達が可能である。新喜皮革では品質がよいとされ価格も高いイタリア産にこだわっている。馬の臀部の皮は固いので時間と手間がかかる天然なめししかできない。光沢があり、固いのだが、曲げたり伸ばしたりしてもしわにならない。時がたつにつれて風合いがましてきて自然なつやすらでてくる。化学製剤のクロムで仕上げた革だとこうはならない。タンニン鞣しの革は耐久性には劣るが可塑性が高く、傷やシミがついても手入れをすることである程度回復する。手入れさえ怠らなければ経年変化で味わいが出て長く使える。反対にクロム鞣しの革は、耐久性が高く手入れをしなくても新品に近い状態が長く続くが、可塑性が低く一旦傷つくと修復できないのでどんどんみすぼらしくなり結局長く使えない。私たちが普通使っている皮革のほとんどがクロムでなめされている。クロムなめしでは薬品と原皮を入れたドラムと呼ばれる大きな樽を二四時間まわして大量になめす。全工程が数日で終わり、均質的な仕上がりが期待できるので、安価に売れるからだ。一方、樫の樹皮やミモザなどの天然素材をつかったタンニンなめしは、ピット（タンニン槽）に浸けたり引き上げたりをくりかえさなければならず、なめしだけで一カ月もかかる。繊維が固いコードバンでは、他の皮より大変で、全工程では一〇カ月もかかってしまう。なめしの具合も手作業でよくみて均質性を確保する。色も均一に染色する為にはどうしても経験がものをいう。どれほど知識があっても手仕事の経験と何工程もの分業の世界になる。勢い大工場が進出するのは難しくなる。中小企業の強み

が発揮できる分野でもある。

1、皮革の町、高木地区へ

新喜皮革専務の新田芳希さんを訪ねていくと、片耳にピアスをつけ、ぽっちゃりして愛嬌のある笑みを浮かべた若者がでてきた。だが馬の皮なめしの話になると饒舌になり、専門的な知識が澱みなくでてくる。奥の深いコードバンのなめしの技術にかける意気込みと自信が伝わってきた。

馬の皮なめし工場を興したのは彼の父親、常喜さんである。新田家は代々高木で皮革にかかわってきた家系で、江戸時代、先祖は高木村の革商人の手代であった。明治時代以降は革問屋をしていた。欧州やアフリカ、東南アジアの皮革を家業とする家系を彷彿とさせる。常喜さんは生真面目な性格で、仕事が趣味になっていた。東京で皮なめしの修行するうちに、馬の尻の部分を生かしたコードバンに興味をもち、独自に研究を始めたという。「父は人と同じことをやるのには興味がなかったんです。ただ、興味は革のことだけで、それだけに打ち込んできました」

それでもコードバンは難しい。当初は尻の部分を数枚業者に分けてもらい、試作してみた。試行錯誤が続いた。それぞれの馬の特色がでる千差万別の皮を均一になめさなければビジネスとしてなりたたない。次第に自信がもてるレベルになったとはいえ、利益を出すにはいたってなかった。それには量産しなければならない。すると尻の部分だけでなく馬皮の原皮を一頭ごと、千枚単位で買わねばならない。他の部分もクロムなどでなめして、無駄なく製品をつくる必要がある。だがすこしの間違えで利益は出なくなる。臀部を切り取る作業も、ほかの部分を無駄なく使うためにはとても重要で難しい仕事だ。繊維がからみあっていて、不均一ななめし方になってしまい、失敗してしまうことがほとんどだ。利益を出すのが大変な世界だった。

戦後、一九五一年に芳希さんの祖父は馬革製造新田商店を創業した。当初はコードバン以外の馬皮専

門のなめしだった。芳希さんの父の常喜さんは学校を終えるとすぐに家業のなめしを手伝い、重い原皮を担いで運んでいくのが日課だった。芳希さんの母は早くから経営のほとんどを取り仕切っていた。彼女の実家は皮なめしをおこなっている家だったので、なめしの仕事には通じていた。

なめし業の家同士は欧米でもアジアでも、婚姻で結びつくことが多い。同業の家から嫁を貰えば家族全体で仕事をするのに便利だし、情報も共有できる。欧州のギルド組織も同じ職業に属する家同士の婚姻が多かった。結婚前は芳希さんの姉ふたりも家業を手伝っていたように、一家全員で仕事をするのは普通のことだった。結局姉達は同業者には嫁がなかったが、皮なめしについてある程度知識があるのはそのためだ。当時家の裏に工場があり、女性は皮のばし、アイロン、荷づくりなどをしていた。女性たちは経理もやることが多かった。これに対して男性の分野は原皮の運搬など力の必要な分野だった。

話を聞いていて、前回紹介した客家の出身の銀行家のチュー氏の記憶とダブってきた。チュー氏の家はインドのカルカッタにあり、皮なめしをやっていたが、父は保険の外交員をやり、母がなめし工場を経営していた。チュー氏が学校からかえるとすぐに現場の労働者といっしょに重いなめし皮を担いで手伝ったものだというのも芳希さんの家を思わせる。インドネシアで出会ったリフカさんという女性の経営者は公認会計士出身で母親がおこしたなめし工場を引き継いだひとだった。男性優位の体力勝負の職場にみえるのだが、案外女性も活躍していて、母親が創業者だったり、商売をとりしきっていたりすることは少なくないのかと思ったものだ。

一九五八年、常喜さんは本格的に馬の皮なめしをはじめることを決意、設備投資をはじめた。一九七三年には経営を妻にまかせ、コードバンを製造していた東京の工場で働いて仕事を覚えることにした。この結果、一九七五年にはタンニンなめしに必要なピットを設置し、製造販売を開始してゆくことになる。一〇年後にはピットは二〇台となってい

た。当時の月産枚数は丸革約一五〇〇から二〇〇〇枚だった。これは十二分に採算がとれる量だが、彼らはさらに上をめざしていた。一九九一年に現在の場所に工場を建設し、ドラム、ピット、自動塗装機械を設置した。これと前後して芳希さんはフランスのリヨンへの留学に出発している。彼の帰国後、新喜皮革はコードバンの仕上げ工程すべてをおこなう工場へと変貌してゆく。

芳希さんは理系で、大学では工業化学を専攻した。彼は明確に後継者としての自分を意識していたので役に立ちそうな学科を選んだ。「わたしは文系じゃないので語学は苦手だったんです。だからフランス語で学ぶのは大変でした」と、芳希さんは頭を掻いた。「日本で大学を卒業したら、修行のためにともかく外国にいこうと思っていました。リヨンにしたのは、パリ、マルセイユにすぐいけるので便利だったことと、気候がいいことです」。英国もドイツも寒そうでやめたという。だが、その選択のおかげでフランス語もマスターし、原皮の取引先との繋がりもできた。この留学は皮革業についての芳希さんの見方を大きく変えることにもなった。

「欧州では皮革に携わる人たちはステイタスが高く、誇りをもって働いている」と彼は感じた。「日本でも皮革専門家の社会的地位をあげないといけない。それにはよいものを生産して職人の収入もあげないといけないのだ」と気づく。最高の品質をつくりあげるには誰ももっていない技術をもつことだ。帰国後なめしの溶剤を改良し続け、どんな原皮でもいつでも均質的で上質な皮革になめせるようになったと自信を深めた。この結果以前は最終工程を千葉のコードバンの工場でやってもらっていたのが全部自分の工場でできるようになった。「もう、コードバンではうちが日本のどこの工場より仕上がりは上ですよ」と自信の笑みを浮かべた。

リヨンでは彼の滞在費用のすべてが私費だった。留学費用について両親は承諾し、積極的な投資とみなしていた。革に関する勉強と投資には糸目をつけない、それが父の方針だった。「一九九〇年代、革

はめちゃくちゃ儲かったんです。だからもうかった同業者の中には不動産や株、ほかの商売に手を出す人々が結構いました。でもうちの父母はそんな使い方をしなかった。とにかく革に関することしかやらなかった。当時レストランや土地などに手をだした人は大抵失敗して潰れてしまいました」

彼の父親はコードバンをやっていたのでほかの革をやっている人々からは馬鹿にされていた。当時なにをつくっても売れていたから、「難しいものを一生懸命やっている変わり者」と思われていた。コードバンは難しい。皮が固く繊維が密集しているのでなめし剤が繊維にはいるのには時間がかかる。牛や山羊、馬の胴の部分より一層手間がかかる。しかし父親を馬鹿にした人たちは、その後不景気になって牛革が売れなくなるとあっという間に潰れていった。

見事なつやをもつコードバン一手で押してまげてもしわにならずすぐにもとどおりになる

一方、コードバンの需要は安定している。牛革より軽いコードバンは高級革ですでに販売先も決まっている。真似しようというところも周囲にでてきたが、そんなに簡単につくれるわけではない。「一〇〇〇枚つくるなかで二〜三枚成功することもあります。でも残りはだめっていうんじゃあ商売にならない。安定的に一〇〇〇枚すべてが売り物になるようでないと。でもそうするには大変な技術がいるんです。真似しようとした同業者は失敗してみんなつぶれました」

ここまで安定的につくれるようになるには三〇年以上かかっている。それでもまだ完璧とはいいがたい。「すぐにできないのがコードバンです。皮は生き物だから一枚一枚全部違うし部位によっても同じじゃないんです。それをどの皮も均一に仕上げると

いうのはとても難しいことです。すべての革にいえることですが、春夏秋冬があり、皮の状態も変わってくる。手が抜けません」

芳希さんと話をしていて気付いたのは、伝統として確立されている親族ネットワークの分業体制の確かさだった。それに加え、彼は新たな専門家養成も怠りない。この二本立てがビジネスを維持している。

コードバンは馬皮の特殊な繊維層の部分を使う。ごく一部にある、隠れている層である。肉部分に接している裏面と銀面（毛と表皮を除去した真皮の表面）の間にある層で、このデリケートな層を削り出すにはプロの技が必要だ。臀部を的確に探り当てて切らなければ胴の部分が小さくなってほかに使えなくなる。馬の臀部の皮は傷つきやすく、脂肪がすくないので取りにくい。切り取るというだけでも綿密な作業だ。皮削り、染色、油入れの仕上げ工程もそれぞれに経験のある親戚一族が工場の外でかかわっている。

加えて芳希さんの工場で働く人々は多くが全国から革づくりをするために集まった部落外の人々だ。集まった「革好き」の若者たちに丁寧な指導をして、長く働いてもらわなければならない。技術が定着しないので、海外からの研修生は受け付けていない。頼みこまれても断っているという。

明治後期に生まれ、民衆のなかにある伝統と美を再発見する民芸運動を興した思想家・美学者として名高い柳宗悦は『手仕事の日本』という名著で知られるが、そのなかで「革細工といえば姫路を思い出すほどその名が遠くまで響いた」と述べている。豪奢な革づくりとして海外にも知られていた「金泥や色漆をほどこした模様が浮き出る金唐革のなめし革」を高く評価しているが、ほかにも姫路の革が剣術の道具として「今でも需要が絶えない」と述べ、「しばしば見とれるほどの技」を示しており、それらが「一朝にして生まれた仕事でないのを想わせる」と絶賛する。まさに柳が述べた『手仕事の日本』の世界を繋げようとしているのだ。

「姫路周辺だと、もう人が集まらないんですが、

青森や沖縄から申し込んでくる若者は結構います。革が好きでつくりたいっていう人ばかりで熱心です。うちは社員寮も福利厚生も完備しているし、給料は大手の工場にまけないです」。周囲の人々が高齢化していき、姫路の中小なめし工場の多くが店をたたんでゆくなかで、芳希さんは、生き残りをかけて部落の外にリクルートの手を伸ばし続けていかなければならない。

江戸時代から明治に移り変わる時、近代皮革産業として大きな変貌を遂げる段階では、部落内と部落外の人々が協働し、必死に製品をつくりあげてゆく過程がみられた。ポスト近代化の波が皮革産業に押し寄せている今、再び両者の協働により、柳がかつて絶賛した「日本の手仕事」の再生と発展が必要とされているのだ。

2. 近代産業としての皮革業

芳希さんの話のなかでてきた彼の父方祖父や父親世代が携わった近代皮なめし業は、明治時代以降にはじまった近代皮なめし手法である。だが近代皮革産業はそれ以前の皮革業と絶縁しているわけではなく、その伝統のうえになりたっていた。多くの皮田部落出身者が近代皮革産業の成立に関わり、活躍している。その筆頭に挙げられるのは弾直樹であろう。部落のなかでも皮革業と医師業や薬製造業に従事する家系の人々は代々富裕であったが、なかでも東の皮革業の元締めだった弾左衛門一族はきわめて裕福で大名並の権勢を誇っていた。

維新後、弾はいち早く軍需産業としての近代皮革事業の重要性に着目し、軍部と結びついて軍需品としての皮革産業をおこそうとした。それで生業を失った皮田部落の人々を助けられるのではないかと考えたのだった。彼は米国人技師を雇い、タンニンなめしの技術や製靴の技術を習得させる伝習所を興した。五〇〇名近くの伝習生を世に送り出し大きな貢献をしたが、本体の皮革工場の経営は行き詰ってしまった。大量発注をした軍部の方針が二転三転していったからだ。結局三井組の北岡と資本提携し

弾・北岡組となり、その事業を継承し東京製皮合資会社が設立される。後に西村勝三らの興した桜組などと合併し、日本皮革株式会社（現ニッピ）へと収斂されてゆく。これらの統廃合のなかで、日本の皮革産業は近代化を成し遂げ世界でもトップレベルの皮革を作り続けてゆくことになる。私財を投じて皮革工場を興した弾は事業には失敗したものの、皮田部落の伝統産業から近代靴産業を担う職人をつくりだすことには大きく貢献したといえる。

弾の事業は、国の殖産興業政策に対応し近代皮革産業を興そうとするものであったが、そういった事業は彼のものだけではなかった。和歌山藩の陸奥宗光は没落した士族の子弟のための軍需産業として製靴訓練を興そうと考えた。そして陸奥と同じ士族階級出身でありながら、出身を問わず希望者すべてに皮革技術を授けようとしたのが西村勝三だった。彼は当時最新技術だったクロムなめしをいちはやく取り入れ、近代軍靴産業を興した功労者である。西村の工場周辺に集まった中小工房で働く人々をも下請けとして支援していた。西村と弾の工場は隣接しており、新しい技術を習う為に弾の配下の職人たちや、周辺の工房で働く人々は西村の工場にゆき、クロムなめしの実習を受けたという。

皮革産業沿革史編纂委員会の呼びかけによって、明治後期から昭和にいたる皮革業界を知る人々が一九五〇年代から六〇年代にかけて数回の座談会を開いている。そこでかつての東京台東区の新谷町のありようを語っている（『皮革産業沿革史』上、一九五九年）。明治にはいって近江から移ってきたなめしや製靴業を営む人々が多くいたという。新谷町には裕福な近江出身の皮屋の人々が住んでいたが、なかには付近一帯を買い占めた為に、電車の停留所から自宅までたどりつくのに他人の土地に足を踏み入れる必要がないほどの富者もいたという。

江戸時代から皮革の運搬や製造にかかわってきた人々は明治にはいっても皮革を扱っていた。江戸時代から存在していたネットワークが形を変えながらも活かされていったからこそ、日本の皮革産業は短期間に発展をとげることができた。近代になって東京に移住してきた人々が皮革業に投下した資本がやがては日本の近代皮革産業が成立してゆく礎の一部となっていったのである。

元来日本ではほとんど靴を履くことはなかった。従って、近代皮革産業は良くも悪くも国家の近代軍需産業として成立し、軍や官僚、警察などの靴需要を唯一の柱として成り立ってゆかざるをえなかった。西欧では、一八世紀にいたって欧州各地を侵略したナポレオンによる大規模な徴兵制がはじまり、それによって靴の大量生産が行われるようになっていった。彼は行く先々で農民を兵力として徴兵し、巨大な軍隊を仕立てていったが一〇〇万にのぼる兵士らに必要なブーツが調達できない。早く、安く、均質的なブーツを大量につくらなければならない。結局フランス国内だけでは調達が間に合わず、外国に発注することを余儀なくされた。おかげでにわかに潤ったのが安めの皮革製品を家内制工業で製造していた英国のノーザンプトンである。まだクロムなめしは発明されていなかったが、なめしの期間を若干短くして、女性や子供もいれた分業体制を敷いた家内工場制をとっていたので安い靴を量産できた。こうして、産業革命によって靴産業が機械化される以前から、彼らはなんとか大量の革をつくりだしていたのだった。革は織機や蒸気機関などの機械に必要な部品としても大量に必要だった。

当時、欧州社会は中世後期から疫病の克服と農産物の増産によって人口が徐々に増えていく時代だった。人口が増えると靴の需要は高まってゆく。馬車などの交通機関が発達してゆくと、部品としての皮革ももっと必要になる。原皮の供給を支えていたのが牧畜による肉の増産である。人口が増えると当然食肉への需要も高まっていたので、英国では領主が農地を羊の放牧に充てて食用肉と羊毛増産に励んだ。このため、仕事にあぶれた農民が都市へと流入し賃金労働者となって都会の労働者人口をささえていった。

日本の場合、江戸時代に幹線道路はすでに発達していたが、馬車ではなく籠であり、靴を履くこともほとんどなかった。それでも一部に革をつかった雪駄が流行したり、鎧や奢侈品に革がつかわれたりして皮革の需要はそれなりにあったものの、戦闘が消滅した江戸時代には皮革の需要が急激に伸びることはなかった。状況が変わるのは西欧式の近代的な軍隊が誕生した明治時代以降のことになる。明治政府が頭を悩ませたのは兵隊に履かせる靴である。輸入に頼っていると膨大な額になるし、日本人の足にあわない。早急に国内産ですべてをまかなわなければならないが、誰かが近代靴の技術を習得した靴工を養成し、工場をたてなければならない。

だがその需要は官公庁を除くと一定していなかった。当時の日本社会では官公庁に勤める人々や警官以外は洋装ではなく、靴を履くのが一般的でなかった。結局靴産業が当初は軍隊を唯一の大口顧客とせざるを得ないのは当然だった。そこに目をつけたのが弾直樹だけでなく、鉄砲などの武器商売で名をはせた実業家の西村勝三であった。

彼は外国人職工を招き、製靴伝習所を運営してタンニンなめしと靴をつくる工場を建てた。皮田集団の職人たちを伝習生として受け入れるだけでなく、窮民や孤児からも希望者を研修生として受け入れた。こうして研修を受けた工員のなかからは部落を離れ、技術者として一般社会にはいってゆく人々もでてきた。その一方で、彼らのなかから中小規模のなめし工場や製靴工場をおこす人々も増えてきた。技術を習い、工場をおこそうと富裕な人々やかつての皮田の職人たちが東京の新谷町に押し寄せたのは前述した通りである。

明治維新後わずか一〇年あまりで日本の軍需用皮革製品はすべて国産に切り替わり、輸出すら可能となった背景にはこれらの人々の働きが大きい。皮田部落の職人たちだけでなく、一般地区から新たにリクルートされた人々も職人としてかかわっていったことは特筆されるべきであろう。

当時西村はいち早く海外を視察し、手工業制マニュファクチャリングのモデルによる分業制を敷いて、多数の職人を一か所に集めた工場をつくってゆく。靴や皮革は出来高で支払い、当時新谷町や木下川周辺に集結していたなめし業者や靴業者は下請けとしても活用されていた。

当時を知る人々の記憶によると、靴づくりの工程は四から五工程に分れていた。明治一〇（一八七七）年頃では、砲兵用の長靴は一足原価三円六〇銭で、軍への納入価格は四円二五銭であったという。当初は原価割れしており、事業が軌道に乗ってもけっして利幅が大きいわけではなかった。だが働いている職人にとってはよい稼ぎになった。彼らの暮らしがたつことを優先すれば工場は時には赤字になってしまうこともあるが、西村はひるまなかった。近代皮革産業をつくる専門職人達を一刻も早くつくりださねばならないという彼の思いもあった。

西村は職工の地位向上と福利厚生にも気を配った。工場出身者および靴工一〇〇〇余名で、西村の皮革会社である桜組の前身の「伊勢勝」の名をいれた伊勢勝旧友会の結成を支援した。そこから、靴工倶楽部、靴工同志会等も次々に結成されている。これらは併合され、後に大日本靴工同盟会となるが、西村は設立にあたり、いずれにも基金を出資している。西村に見いだされ神戸伊勢勝造靴所で靴工の修行をした城常太郎は、日本における労働組合運動の源流となった職工義友会を、社会運動家の高野房太郎らともにつくった。後に義友会は、片山潜らも参画し労働組合期成会へ発展、これを母体として靴工の組合も生まれることになる。

西村は弾直樹亡き後、後を継いだ息子を技術指導や下請けに便利なように自社工場のある三河島に呼び寄せ、三河島周辺には中小のなめし工場と靴工場が結集してゆく。一九〇七（明治四〇）年に桜組が株式会社東洋皮革として統合されると、その重役、技師などとして皮田部落の出身者が、一般地区の人々とともにかかわってゆく。靴工たちのなかからは渡米して修行をするだけでなく、米国で開業する人々もでてきた。

これらの成果は日本の近代化のなかでも誇るべきことである。現代の日本がトップレベルの皮革をつくりあげられるのは当時の伝習所で教えた技術の確かさや工場の統合によるものである。いくら工場が近代化したとしても、そこで働く職人の技術レベルが高くなければよい皮革はできない。たとえコンピュータ制御ができる工具をもっていても、二一世紀に至っても皮革は依然として手仕事の世界であるというのは東西の皮革のプロたちが述べていることだ。

西村勝三の桜組は日清戦争前後にすでにタンニンなめしをはじめていた。これは当時の西欧の皮革産業とほぼ同程度の進化である。一九〇七年あたりにクロムなめしが桜組によって導入される。クロムなめしは北米で開発され、今やほとんどの皮なめしがこの手法でおこなわれているものの、当時は欧州でも先端技術で、英国の保守的ななめし業界ではしばらく取り入れられなかった。結局欧州で定着してゆくのは一九二〇年代であったという。導入された時期からすると日本のほうが英国やイタリアより早かったかもしれない。桜組ではいち早くその技術を取り入れ、多くの職人を受け入れて研修させている。外の職人であっても、なめしの経験がなくとも桜組は工員として受け入れ、技術を習わせた。

大正期、明治皮革にクロムなめしを依頼された職工は、一枚をなめす工賃が四円二〇～三〇銭であったという。これはかなり高い技術料で、革工は毎日人力車で工場に出勤していたほど羽振りがよく、大切にされたという。

西欧では、中世の皮革ギルドでは一定期間親方のもとで訓練をうけてからは別の親方のもとに移って修行することが認められていた。だが、ギルドが崩壊してゆく一八世紀後半からは、企業秘密を守る為に他から工員を受け入れるインターン制度はむしろなくなってゆく。それに対し、西村のおこなった開放戦略は「背に腹はかえられない」という事情があったにせよ、結果的に工場を超えた下請け制度や

インターン制度を生みだし、日本の近代皮革産業の速やかな発展に貢献してゆく。

西村や弾の播いた種は靴工を技術者として確立させた。先にのべた靴工たちのなかには、近代労働者としての自覚をもち、当時の日本において職域としての「技術者」や「職工」として社会に組み入れられていった人々も多い。この点で、皮田部落を出自としたなめし職人のなかには江戸時代とは一世を画する専門家、スペシャリストとしての意識をもつ人々が出現した、といえると思う。

終わりに

二一世紀の日本の皮革業をみるとき、このような近代の「皮革業のなかでの職制の確立」についての評価があまりなされていないのは不思議に思う。欧州やアジアの伝統的な「皮革業」をみると、彼らの背後にある「伝統」は、「ブランド」として活用し宣伝に利用するためだけのものではなく、専門職人たちのプライドにもつながっている。これに対し、日本では近代において成し遂げられてきた伝統的職業の展開についてあまりにも評価されていない。西村勝三と弾直樹は皮革業を近代化させるために協働し、資産を傾けてその発展に貢献し、生涯を閉じた。弾直樹は事業家としては破産し、富を蓄積することはなく、西村勝三も労力の割にあわない仕事をひきうけたものだと揶揄されることもあったが、彼らは多くの職工を育て自律の支援をしたことには満足していた。

現在日本の皮革は世界でもトップクラスの一角を担っており、品質の高さにより国の内外で篤い信頼を得ている。この礎は明治時代の近代皮革産業によってつくられた。新喜皮革の芳希さんは海外にでて「皮革屋としての誇り」に思い至った。彼が「高い専門性と品質」を求めた先には部落と外を繋ぐ「プロフェッショナリズム」の確立への思いがあった。世界で質の高い製品として認められれば収入は安定し、プロとしての自信も育まれる。それは西欧のように「伝統」を受け継いだ「正統派」であるこ

とへの誇りを「発展させた」という自信にもつながる。だがその「伝統」は、必ずしも血縁関係によるものばかりではない。「受け継ぎたい」と考えて参加してくる人々すべてに共有されてゆくものでなくてはならない。

かつてスペインのバルセロナの郊外にあるイグアラダという皮革のまちを訪れた時、四〇〇年以上続いている皮なめし工場を外からみせてもらったことがある。イタリアやフランスの超高級品に使われる革をつくっているということで、企業秘密だからとなかにはいれてもらえなかったが、日本にもこの工場に匹敵するような歴史をもつなめし屋がいるのではないかとふと思った。

いつか「ヴィトン」や「グッチ」と張りあえる世界のブランドが部落から誕生したらどんなに素晴らしいだろうか。部落のなかで、今も皮革づくりで成功している工房を経営している人々はけっして多くはない。私の訪れた工房のなかにはペルー出身の日系人が主戦力で働いているところもあった。「皮の仕事は大変だけれど親方に信頼されているから」とルイス・カネシゲ君はいった。まだ二〇代だが、父親や弟と一緒に工房で働いて住宅ローンで建売の家を買ったと誇らしげだった。彼の親方は「無論生き残りたいと切に思いますよ」と決意を語った。

だが、確実に利益を生みだして生き残っていくために熾烈な戦いを勝ち抜いていかねばならない。生みだされた革は一流品だ。世界のトップクラスの仕上がりを自任し、「世界一だ」と豪語する工房もある。これらがいつかは一般の人々にも知れ渡り、憧れを抱かせるようなブランド力をつけていってほしいと私は心から願っている。日本の手仕事の粋としての「ジャパン・ブランド」の革が内外に認識されるようになったらどんなに素晴らしいだろうか。そんなことを夢見ながら、私は芳希さんの工場を後にした。

（にしむらゆうこ・駒澤大学教授）

数字から見る人権課題　No.5

今号の数字

8．6

先日のこと。今号の数字を書くにあたって「何がええやろか？」と20代の事務局Oに相談したところ、即答で「8．6！」と返ってきた。ヒロシマ・ナガサキへの原爆投下と敗戦70年を迎えた今夏は、強行採決された戦争法案を廃案にしようと全国各地で抗議行動が活発になっているが、その先頭に立っているのはSEALDs（自由と民主主義のための学生緊急行動）などの若者だ。「君もなかなかやるな～」と返すと、「こんな話を知ってますか？」と、ネットに流れるあるデマについて教えてくれた。

「8.6秒バズーカ」という吉本興業のお笑いコンビを知っているだろうか？　「ラッスンゴレライ！」という意味不明な言葉をリズムに乗せるネタで中高生の間で大ブレイクしたが、コンビ名が8月6日の原爆を意味しており、「ラッスンゴレライ」を漢字で表記すると「落寸号令雷」。これは米軍が原爆を落とす号令の暗喩だというものだ。ためしにネットで検索するとあきれるほど出てきた。デマは「2人は在日コリアン集住地域出身」「反日活動家だ」とお決まりの流れとなっている。政治家、芸能人……発言が気に入らなければすべてが在日朝鮮・韓国人。ネット上ではもはや当たり前の現象となっている「在日認定」という言葉。

昨春に出版された『九月、東京の路上で』という本がある。関東大震災の際に起こった朝鮮人虐殺事件の実相を当時の手記や証言などを基にまとめられた一冊だが、著者の加藤直樹さんへのインタビューを先日、事務局のKとIがおこなった（インタビューの全文は県連HPに掲載されている）。加藤さんは朝鮮人虐殺を単に「地震の混乱の中でデマが流れて、パニックになった人たちによる」事件だと思っていたが、行政の差別的な偏見がデマを拡散させ事態を悪化させたと指摘する。

ヘイトスピーチが蔓延する状況や今回の騒動、首相が集団的自衛権を語る時、かならずある国を仮想敵国として説明している今、単なるネット上のデマとして見過ごすことはできない。

（北川真児／部落解放同盟兵庫県連合会事務局）